

「韓国民主主義の岐路：ろうそく集会の歴史的な意義」

崔喜植（韓国・国民大学校副教授）

最近、世において韓国は本当に不思議な国になってしまいました。理解しにくい、おとなしくない人たちが住んでいる国のように報じられており、ちょっと韓国に関するイメージがよくないことを私は残念に思っています。それでも韓国は人が住みよい社会を作るために頑張っていると思います。韓国は韓国の歴史を歩んで自分なりの歴史を作ってきたということを理解すべきであると思います。日本も同じですね。アメリカもヨーロッパも同じで、それを前提にして話さないと韓国に関する正確な理解ではないと思います。その意味でろうそく集会は日本のマスメディアでよく報じられており、それがまるでゲームのように娯楽のように報じられているのを見て、ちょっとこれだけではない、やはり韓国社会において大きな意味を持って、また世界的にも大きな意味を持っているということをちょっと強調したいと思っています。



ろうそくの記録

取りあえず、〈表-1〉のろうそく集会の記録を見ると、もちろんこれは主催機関の推定ですが、そしてソウルだけの参加人数ですが、多くの人たちがこのデモに参加したことが分かっております。また、多様な世論調査を見ても大体全国民が参加したということが分かっております。

〈表-1〉ろうそく集会参加人数

	日時	参加人数（ソウル）（主催機関推定）
1 次	10 月 29 日	50,000
2 次	11 月 5 日	200,000
3 次	11 月 12 日	1,000,000
4 次	11 月 19 日	600,000
5 次	11 月 26 日	1,500,000
6 次	12 月 3 日	1,700,000
7 次	12 月 10 日	800,000 (12 月 9 日、弾劾)
8 次	12 月 17 日	650,000
9 次	12 月 24 日	600,000
10 次	12 月 31 日	900,000

ここで注目すべきものは、〈表-2〉のように子どもと一緒にデモに参加したということです。これは本当に大きな意味を持っており、普通デモンストレーションということになれば戦うことなので子どもを連れてこないですね。しかし今回のろうそく集会にはたくさんの子どもの来、親たちも歴史教育に役に立つということで子どもたちを連れてきたわけです。

〈表-2〉ろうそく集会関連世論調査

○ ユン先生（株）の12月19日の調査

子供と一緒にろうそく集会に参加することが歴史教育に役に立つと答えた人は62.5%。

その内、38% が実際に子供と一緒にろうそく集会に参加。

ろうそく集会の特徴

私は社会運動の専門家ではないですが、政治学者の感覚で現在のろうそく集会がどんな意味を持っているのかをちょっと説明したいと思います。やはり、最も重要なことは国民主権、憲法に書いてある一番重要な原則を国民が意識したということです。憲法に書いてある国民主権というものを自分たちが意識して、自分が歴史を作るという、われわれが歴史を作るという自意識が国民の間で根付いたということで本当に自信感のあるデモンストレーションになっているんです。

次に、私も同じでしたけれども最初は怒りを感じました。このような政治になってしまったということで怒りを感じ、その後は心配になりました。この国がどうなるのか本当に崩壊するんじゃないかという心配をして、次には絶望しました。朴槿恵^{パク・クネ}さんの対応を見て、われわれが選択した彼女が本当の政治家であったのか、わが国に未来があるのかと。その後、このような国を私の子どもにあげることができないという、このような感情の流れがありました。しかし、最後のところは未来への希望になりました。たくさんの人たちが集まって未来を話す。そしてこのような国民の力によって国が変わるかもしれないということを感じて本当に希望に変わりました。このようにろうそく集会の前後で感情が激しく変化したんですけれども、私も同じ感覚でこのろうそく集会を見て、他の人たちも大体は同じだと思います。そして今は未来への希望を持ってこの国を見ることができました。

次は、日本のマスメディアでもよく報じられているのでよくわかると思いますが、平和的に行われて、そして成熟した市民意識の集会であったということです。広場の政治が行われましたが、子どもたちもたくさん集まり、まるで遊びのようにデモンストレーションをやっているんです。そして集会後、ごみを整理したことにも成熟したことがありました。しかし、私が最も注目しているのは自由発言の集会でした。あらかじめ申請すれば自分が舞台に立って自分の意見を話せるという集会になりました。これで自分が考える韓国の未来を人たちに話せる、それによって共有できる何かが生じるんですよ。それによって本当に広場の政治になって民主主義の成熟、もしくは発展につながったと思います。

ろうそく集会の歴史的な意味

〈表-3〉のように、これまでの韓国社会は3回の大きなデモがありました。1960年、1987年、そして去年の2016年でした。大体、何かよくないことが起こって国民が行動するという形でした。今回のろうそく集会は進行型であり、弾劾はさせただんですけれども社会改革につながるかどうかはまだ分かりません。1960年と1987年のデモンストレーションは結果を見せまして、韓国社会の発展につながりました。結局、二つの共通点は政治は不良でしたけれどもそれを国民の力で先進化したということです。したがって、われわれは今、希望を感じています。韓国の政治は恥ずかしいぐらい不良になったが、韓国の国民の力によってこれを発展させたということを昔、経験したし、その経験から今回のろうそく集会も韓国の発展につながることができるという希望が溢れています。

しかし、ろうそく集会がいかなる結果をもたらし、韓国がいかなる国になるのかをはかる二つの問題があります。まず、希望と絶望の岐路だと私は書いておりますけれども、もし韓国国民が広場で戦い、自分の意思を見せたにもかかわらず、韓国社会が改革されないと、韓国民主主義は絶望に陥ってしまいます。しかし、昔の経験から韓国は必ず改革を成し遂げると思っております。そうするとこれが希望につながってだんだんいい社会をつくる引き金になると思います。

〈表-3〉 韓国の大きな転換

	4・19 革命	6・10 抗争	ろうそく集会
時期	1960 年	1987 年	2016 年
原因	1960 年の不正選挙	民主運動学生の拷問殺人	国政壟断
主体	学生中心	学生中心 + 中産層	国民参加型
性格	民主化運動	民主化運動	政権退陣運動、 社会改革運動
結果	李承晩大統領の下野と 議院内閣制の樹立	民主化宣言と 大統領直接選挙の導入	弾劾と憲法改正（？）
歴史的な意味	70-80 年代の 民主化運動の母体	90-2000 年代の 社会運動の母体	民主主義の成熟化への 母体（？）

二つ目は民主主義の複雑性を韓国がいかに理解すべきであるのかに関するものです。民主主義とは2つの原則の上で立てられているものです。一つ目はレスポンシビリティ（responsibility）ということでレスポンスの名詞です。すなわち国民の意思に反応しなければならない、国民の意思に従わなければならないということです。そのような一つの原則があるんですけども、もう一つの原則はやはりアカウントビリティ（accountability）ということで共同体への責任というもの、すなわち未来への責任を持って仕事することも民主主義の重要な原則です。

しかし、この2つの原則が実は矛盾しているんです。普通、レスポンシビリティというのは直接民主主義に近い原則で、アカウントビリティは間接民主主義、すなわち代議制民主主義に近い原則なんですけれども、韓国は国民の参加、すなわちレスポンシビリティという概念で行われている民主主義と、国会・政党という国民の代理人によって行われる代議制民主主義がどう両立できるかという岐路に立っています。

私は国民の参加と政治の合理的なリーダーシップがバランスをとって互いに緊張しながら民主主義を支えるべきだと思うんですけども、今、韓国では国民の政治参加にバランスが少し傾いており、これをいかに代議制民主主義とバランスを取れるようにさせるかということが、韓国の民主主義の本当に大きな課題ではないかと思っています。それにもかかわらず、やはり韓国国民は自分の力で政治、社会を変えてきたというような自信感があるので、これからも参加民主主義における社会運動が本当に盛んに行われると思います。この国民の政治参加と、代理人である国会、そして政党をいかにバランスをとらせるのかということは、韓国民主主義の課題でもあると思っています。

やはり日本とはちょっと違うんですね。日本はアカウントビリティという概念で民主主義を考える傾向があります。レスポンシビリティの概念もあるんですけども、大体はアカウントビリティによる民主主義が成熟な民主主義であるというような認識があるんです。しかし韓国はレスポンシビリティという概念によって民主主義を考えているので少しこの政治のスタイルが違うようになるんです。自ら行動して政治に参加するのが韓国の特徴であり、それには問題点もあり、そしてメリットもあり、これをどう生かして韓国の民主主義を発展させるのが韓国国民の課題であると思っています。

慰安婦問題でもこのような傾向が表れていますよね。すなわち市民運動によって去年行われた慰安婦合意を廃棄させようとする動きがあります。これは国民の意思を政治に反映させようとする国民の行動であって、政府の行動ではないんです。これは理解すべきではないかと私は思っています。もちろん国民の意思が合理的に出るように、国民の意識の成熟化が必要かもしれないですけども、それにもかかわらずこのように自分の行動で自分の意思を政治に反映させようとすることは、民主主義において本当に重要なものではないでしょうか。

もちろんこれとアカウントビリティによる民主主義をいかに両立させるのかという問題は依然として韓国の課題ですけども、それにもかかわらずこのようなレスポンシビリティによる民主主義も民主主

義の発展において重要なものではないかと私は思っております。以上で発表を終わらせていただきます。

第三報告

「現代日本の参加民主主義：脱原発運動、反ヘイト運動、一五年安保」

五野井郁夫（高千穂大学経営学部教授）

なぜ路上の民主主義、参加民主主義が近年隆盛しているのか。これはトマ・ピケティの『21世紀の資本』でも言われたとおりですけれども民主主義国においてそれこそ財の再分配と福祉国家というものが一つの課題であるとするればそれが崩壊しつつある、あるいはうまくいっていないと、そういう状況があるわけです。であれば、どうやって代表制民主主義の外から代表制民主主義を変えていくのか。もちろん代表制民主主義を壊すという動きもありますが、だけれども今回のさまざまな各国の運動は、代表制民主主義を活性化するために議会以外から人々が声を上げたわけです。

民主主義というのは2つございまして、1つはいま申し上げた議会制民主主義です。これは選挙を通じて改革を求めていく院内の政治といわれるものです。他方で参加民主主義は院外からデモや集会、そして署名活動さまざまなありますね。日本国憲法で誓願というものが認められていますけれども、そういった民主的な数の力で議会外から政治文化の環境を変えて、そしてその動きを議会の中に環流させていくという動きであります。そしてこういったものが2010年代、世界中で見られるようになりました。非民主主義国においてはアラブの春がそうですけれども、まさに民主主義の正義を求める運動として出てきています。他方、民主主義国においては今、申し上げたように議会制民主主義がうまくいっていない、と。だったら議会制民主主義をわれわれの声で変えていこう、そういうふうな参加民主主義の運動が出てくるわけです。これは実は別に何か陰謀論とかでも何でもなくて日ごろ不満を持っている人々が抵抗運動などを自己組織的に行っています。こうやって過去のさまざまな既存の政治のモードや統治性の転換を図っていくのです。

どういうことかという、今まで新自由主義の下ではもう世の中変わらないんじゃないか、という発想から決別することです。例えばわれわれの労働賃金も変わらないでもう人生暗いと思ったわけですが、だけれども何か少し社会運動をやってみると、例えばシアトルをはじめとして全米各地では最低労働賃金1時間が15ドルになったりしている。そうすると、何かやってみると少しは変わるんじゃないかということが分かってくる。そういう運動が1990年代後半からアナキズムなどの中から出てきたり、直接民主主義、ラディカル・デモクラシーというかたちで出てきました。

それがより具体的になっていったのがオキュパイウォールストリートという運動だったりするわけですが、それは一連のアラブの春、カイロのタハリール広場に人々が集まって、あるいはマドリードのプエルタ・デル・ソル広場に集まって、群れとして政治を変えていく。そういった公共空間での訴えがあるわけです。まさにその不正義だと思ふ状態を、人々は参加民主主義の表現としてデモの占拠、オキュパイということをやっております。そういう反覆が各都市でどんどん出てきました。デリダが言うところの差異化しつつずれていく、差延していく社会運動が、ニューヨーク、ロンドン、東京、香港、台湾、ソウル、そういったところで瞬く間に世界中でインターネットを介してウェブを介して出てくると。例えばニューヨークのオキュパイ運動が変貌を遂げ、Black Lives Matter運動や、この前のアメリカの大統領選におけるサンダースの支持層、もっと言うとサンダースの選挙対策本部になったりするわけです。あるいは先ほどご案内はありましたが、これもオキュパイセントラルなんかもうそうですけれども、あるいはオキュパイ旺角などもそうですがこのようなかたちで人々が民主主義を求める運動へと広がってい

